

## 最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

神奈川県立歯科大学 歯科矯正学分野 湯浅 賢一 に

対する最終試験は、主査 松尾雅斗 教授、副査 槻木恵一 教授、

副査 泉 雅浩 准教授により、論文内容ならびに関連事項につき口頭試問を

もって行われた。

また、外国語の試験は、主査 松尾雅斗 教授によって、英語の文献読解力に

ついて質疑応答と口頭試問により行われた。

その結果、合格と認めた。

主 査 松尾 雅斗 教授

副 査 槻木 恵一 教授

副 査 泉 雅浩 准教授

論 文 審 査 要 旨

Condylar asymmetry in patients with mandibular  
asymmetry assessed by cone-beam computed  
tomography

神奈川歯科大学 歯科矯正学分野  
研究生 湯淺 賢一

(指 導： 山口徹太郎 教授 )

主 査 松尾 雅斗 教授

副 査 槻木 恵一 教授

副 査 泉 雅浩 准教授

## 論文審査要旨

学位申請論文である「Condylar asymmetry in patients with mandibular asymmetry assessed by cone-beam computed tomography」は、下顎の非対称性を有する患者の偏位側と非偏位側の下顎頭の大きさをコーンビーム CT (CBCT) を用いて計測比較した結果を示した論文である。

下顎頭の成長と安定性は、下顎のサイズと形態を達成・維持するために不可欠な要素とされている。下顎の非対称性を有する患者では、偏位側と非偏位側の下顎頭形態に左右差があるという仮説に基づいて分析は行われた。これまで下顎非対称患者の下顎頭の左右側で有意な形態差が認められる事は明確にされておらず、本論文において実証しようとする研究目的は高く評価できる。

研究方法の概略は、矯正歯科治療の診断のために CBCT を撮影し、顔面の正中基準平面からのメントン (Me) のずれが 4mm 以上を対象者とした。対象者は合計 47 名 (男性 19 名、女性 28 名、年齢分布 18-44 歳、平均年齢 24.7 歳) で、日本人のみならず、韓国人、エジプト人を含んだ多施設共同研究である。Me が存在する側を偏位側、反対側を非偏位側とした。計測項目は、condylar length (下顎頭長)、condylar width (下顎頭幅)、condylar height (下顎頭高さ) とし偏位側と非偏位側とで比較した。研究テーマに対する研究方法の組み立ては論理的であり、適切な解析手法が行われている。また、本研究は神奈川歯科大学研究倫理審査委員会の承認を得ており、倫理的配慮が十分になされているとともに研究テーマに対する方法の組み立ては論理的であり、適切な解析手法により実験が行われている。

結果として condylar length (下顎頭長)、condylar height (下顎頭高さ) に統計的に有意な差が見られた (それぞれ  $p < 0.05$ 、 $p < 0.000$ )。この有意差の要因についても検討した結果、condylar length (下顎頭長) は、前後方向の骨格パターンに統計的に有意な差が見られ ( $p < 0.05$ )、特に class III と class II との間で統計的に有意な差が見られた ( $p < 0.05$ )。condylar height (下顎頭高さ) でも、国籍間において統計的に有意な差が観察され ( $p < 0.05$ )、特に日本人と韓国人の間で統計的に有意な差が観察された ( $p < 0.05$ )。

以上より下顎非対称の患者では、偏位側と非偏位側で下顎頭の大きさに違いがあり、この違いは、上下顎顎間関係における前後的パターンや国籍に関連していることが適切な方法により明快に導き出されている。本研究は矯正学的な症例より形態学的・人類学的な下顎頭の形態についての知見を新しく見出した点は高く評価できる。

本審査委員会は、論文内容ならびに関連事項につき口頭試問をもって行われ、結果の解釈と今後の展望について専門分野からの質問がなされ、適切かつ十分な回答が得られた。その結果、本研究で導かれたものは今後の歯科矯正医療の基盤になるとの結論に至った。そこで、本審査委員会は申請者の博士論文が博士 (歯学) の学位に十分に値するものと認めた。